

# 福祉系 対人援助職養成の 現場から<sup>16</sup>

西川 友理

## Aさんの児童養護施設での実習

私が児童養護施設の職員だった頃、社会福祉士の実習生Aさんと一緒に、朝一番の幼児部屋の勤務に入りました。

Aさんは、いかにも真面目な女子学生！という雰囲気の実習生です。

「じゃあ、まずは子ども達を起こしましょうか」と言うと、

「はいっ！」

とはきはき返事をして、さっと3歳児が10名ほど寝ている部屋に入り、カーテンをばさーっと全開、くると振り向いて、寝ている子ども達に

「おはようございます！今日も一日よろしくをお願いします！」

と大きな声で言い、90度のお辞儀！

「いや、待って待ってそうじゃなくて！」

「はい？」

あ、そうじゃないってことはないのか、と気付く私。

間違えてないけど、ちょっとヘン…どう伝えようかな。

「そうじゃない、っていうか、ええっとあの、自分が子どもの頃、お母さんにどうやって起こしてもらったか思い出して、そんな風に子どもを起こしてくださいね」

「あ、はいっ！えっと…オハヨウゴザイマス、アサデスヨー…」

戸惑いながらもAさんは子どもの布団に近づきました。

その日の夕方、Aさんに話を聞くと、Aさんは児童養護施設での実習前に、数週間高齢者施設で実習をしてきており、前述の行動はその高齢者施設での起床時の動き方であったとのことでした。

高齢者施設の職員からは、「ご利用者様は、お客様だからね」としよっちゅういわれ、「ご利用者様達から勉強させていただいている」という気持ちで日々接していたとのことでした。

「同じように、福祉施設の職員ってそういう風にするもんやって思ってたんです。でも、違うんですね。そっかー、ここは子ども達の家ですもんね…」

「いや、でもAさんの“子ども達から勉強させていただく”って気持ちは間違いじゃないし、すごくいいと思いますよ」

などと言っていた数日後、Aさんが相談に来ました。

「…子どもはかわいいけど…難しいです。どう動いたらいいか、解らないんです。職員の皆さんみたいに、自信持って子どもに指示できないし、子どもといっしょに遊んでいてもどこか客観的に自分を見てなきゃいけないし、お母さんみたいになつたらいいかと思っていたけど、お母さんじゃないし…ていうか、実習生ですし…」

「…うーん、難しいですか…」

「高齢者施設では私、こんな難しさは感じなかったんですね。職員さんのように動いて、職員さんの仕事を見て、職員さんのやり方を覚える、みたいな感じで…」

「でも、Aさんって基本的に職員のやり方を見て、職員の指示に従って、同じように動いていますよね」

「はい。でも、ここは職員さんみたいに動いても、子ども達の反応って全然違う。信

頼関係がそこまで出来てないから、職員さんみたいに言ったりしたりも出来ない。私の役割って…何なんでしょう。実習生って、どう動いたらいいんですか？どこまで関わったらいいのか、わからない…」

「実習生の役割ですか…うーん…」

## 実習生という役割

厚生労働省は、以下の3つを社会福祉士の実習の“ねらい”としています。

1. 実習を通して、相談援助に係る知識と技術について具体的かつ実際に理解し実践的技術等を体得する。
2. 社会福祉士として求められる資質、技能、倫理、自己に求められる課題把握、総合的に対応できる能力を習得する。
3. 関連分野の専門職との連携のあり方及び具体的内容を実践的に理解する。

ですから、Aさんの「実習生の役割って何？」という質問に対しては、「実習生にはこの3つを達成することが課せられています。だからあなたの役割はこの3つをこなすこと。」と伝えればよかった…のでしょうか。

当時の私には、Aさんの感じている「実習生の役割のわからなさ」は、そういった制度的な枠組みとは少し違うように感じられたのでした。Aさんの発言にある「私の役割って何？」は、単純に「自分が何をやる人なのかわからない」ということではなく、「どう動いたらいいか、どう関わったらいいか」つまり、子どもの自分への態度に対し「自分の言動のあり方の質や度合が

わからない」ということを言っているのではないか、と感じたのです。

## Bさんの児童養護施設での実習

また、こんな実習生もいました。

法務教官として罪を犯した子ども達と20年ほど関わってきた女性、Bさんの、社会福祉士実習指導を担当した時のことです。

「子ども達を見ているとですね、社会的背景って人生に大きく影響するなと思ったんですよ」

「なるほど、そうですね」

「私には事情があって、今は夫も子どももおりません。しかし、だからこそ、間違った方向に進んでしまった子ども達を何とか更正させたいと頑張ってきました」

「頑張ってこられたんですねえ」

「今、テレビでも虐待やらなにやらいろいろ話題になっているでしょう？」

「ええ、そうですね」

「ですから、ぜひ様々な社会的背景を持つ子どものいる場で実習したいんです！」

と、発言に熱のこもるBさん。

彼女は希望どおり、児童養護施設で実習をする事になりました。

いざ実習が始まって数日後、私はBさんが実習をしている施設に巡回指導に行きました。

久々に見たBさんは、なんだかうかない顔です。

「うーん、どうも勝手に違います…子どもの扱いは慣れていると思ってたんですけど…」

「と、いいますと？」

「あのう…子どもがですね…私の言うこと

を聞かないんです」

Bさんは少し言いづらそうでした。

「例えばですね、学校から帰って宿題をする時間だというのに『宿題をしなさい』って言ってもやらない。なのに、職員さんがうまいこと言うと、ちゃんとやるんですよ…あの言い方が出来ない」

そこで私が、

「…まだ出会って数日ですからねえ」

というと、Bさんは

「だって、子どもは大人の言うことをきくものでしょう！」

と言い、すぐに、

「きくもの、というか…きかせなくちゃいけない…でしょ？」

と言い直しました。

「そうでなくちゃいけないと思っていたけど、どうもそれがここでは通用しないようだ、ということですかね」と問いかけると、

「…そんな感じですね。」とうなだれるBさん。

「うーん…ここの職員さんや子ども達は、Bさんみたいに『そうでなくちゃいけない』って思っているんですかね。どう思われますか？」

「…何だか、私から見ると、職員さんはそういうとこ、甘い感じがするんですもの…。でも、それで子どもは職員さんの話はきくんですよ…なんでかなあ？」

その施設の職員さんが私に言いました。

「あのBさん、なんかちょっとね…どうしたらいいかわからないですよ。子どもに対して、口調から態度から何から、全体的になんとなく威圧的というか…。Bさんに、『もうちょっと穏やかに・・・』とは言うんですけど、どうもよくわからない

みたいで…。というか、こちらからの注意のしかたもよくわからなくなってきました」

「と、言いますと？」

「Bさんの言っていることは正しいことなんです。言い方も明らかな命令口調でもないけど、なんというか、全体的に権威主義的というか、押し付けているような感じの言い方で、威圧的に見えて子どもが引いてちゃうんですね。」

### 児童養護施設における実習生

Bさんには、犯罪少年と呼ばれる多くの子ども達に“法務教官”として出会い、触れてきた業務経験があり、これによって「子どもに対する威圧的な振る舞い」が形成されたのでしょう。

しかし、それは“法務教官”という役割による子どもへの接し方でした。

子どもが相手なら、同じようなものと思っていたBさんは、自らが築き上げてきた接し方が、施設職員の方と違うことに戸惑っていました。

施設職員の方は、子どもへの接し方が威圧的なBさんに、どう対応すればいいか、戸惑っていました。

このBさんもまた、Aさんと同じく、実習生として「自分の言動のあり方の質や度合がわからない」状態でした。

実は、「自分の役割がよくわからない」「どこまで関わったらいいかわからない」という言葉、ひいては「子どもからの関わりに対し、自分の言動のあり方の質や度合がわからない」ということは、児童養護施設

において実習生からよく聞かれる訴えの一つなのです。ところが、障害者分野や高齢者分野での実習生からは、あまりこういう訴えがありません。全くないことはないのですが、児童養護施設に比べると圧倒的に少数です。

そんな実習生の話を、ある児童養護施設の実習担当職員の方にとすると、その方はおっしゃいました。

「私はそんな実習生さんに、実習期間が半分ぐらい過ぎたあたりでタネあかしをするんです。『なんてことないよ、実習生として“何らかの役割”が求められているのではなく、“あなた自身”という人間が求められているんだよ、ってね。』」

あ、そういうことか、と思いました。

これまで、どういう表現をしたらいいかわからなかったのですが、つまりそういう事なのか、と思いました。

### 児童養護施設の子どもと関わる

実習生の「どこまで関わったらいいかわからない」には2つの原因があるように思います。

私達は物心ついた頃にはすでに、周囲からの働きかけに対し、相互にコミュニケーションをして生活をしています。相手の関わりに対し、自分の関わりのあり方を、大体こんな感じかな、と推察して、それに沿ってふるまい、生活しています。推察が間違っていれば、いさかいが発生します。

私達の多くは地元の小中学校においてその土地の文化を共有する人達と過ごしたの

ち、高校や大学においては学力や経済力、将来への思いなどが大体似ている人たちとの交流を中心とした生活が営まれます。そこから社会に出た時に、学生時代と比べて社会関係のバリエーションは広がるでしょうが、多くの場合、仕事や趣味の集まりなど、ある程度自分の社会関係に繋がる人たちと関わることとなります。

つまり、多くの人は、世代や文化や社会状況が比較的自分と似通った人々や、何らかの関連がある人々の中で、それぞれの社会的背景に立脚して生活をしています。

そのような社会関係を持って生きている実習生が、児童養護施設に実習に行きます。

そこにいる子ども達は、実習生とはまったく違う人生を歩んできています。何より、実習生が過ごしてきた時間や社会関係と比べると、ずっと少ない時間、少ない社会関係しか経験していません。

まずここで1つの原因、子ども相手ということ、普段あまり接することのない、世代的にも社会関係に大きなギャップがある相手と接しなければならないという“戸惑い”があります。

一般的な人付き合いは、お互いが社会関係をわきまえ、「自分の言動のあり方の質や度合が、おおむね節度よく保たれている」状態があります。

しかし児童養護施設にいる子ども達は、思ったよりずっと“生身のわたし”“その子ども自身”で実習生に接して来ることがあります。例えば、過剰に親密であったり、攻撃的であったり、突然自分の人生の重大な事件を話し始めたり、逆に全く関わってこなかったり、というように。

人はそれぞれ違う人生を歩んできています。普通は、よほど親密にならない限り、それを生身のまま、相手に見せたり、突きつけたりすることはありません。だから、生身のまま、見せられたり、突きつけられたりする事もそうありません。見せろ、突きつけろと求められることもありません。

ここで2つ目の原因、家族でも友人でもない子どもと“生身のわたし自身”のやり取りをするという、実習生にとって非日常的な社会関係を求められていると感じる“戸惑い”があります。

なぜ子どもは“生身のわたし自身”で接し、また実習生も“生身のわたし自身”で返さねばならないと思ってしまうのでしょうか。

子どもは、法的に行使できる権利を制限され、未成年とされています。だからこそ、児童養護施設に入所している子ども達は、様々な事象に出会った結果、自ら利用したいと考えたわけではなく、行政により保護され、措置され、その施設において日々生活しています。

そういった子ども達にとって、出会って間もない人を「この人はどういう人なのか、私にどう接してくるのか」と五感で体感し、直感的に判断することは、生きていく上で欠かせない上位スキルになり得るのでしょうか。おそらく子ども達は無意識にそれらを行っているのではないかと思います。

子ども達は理性的に考える力も未発達で、感情を言語化する能力もまだそれほど高くありません。だから“生身”でぶつからざるを得ません。

そんな子ども達の言動が、実習生側には、

「“生身”でのコミュニケーションを求められている」「大人としての“わたし自身”のあり方を試されている」と感じられるのではないかと思います。子どもにしてみれば、実習生を試しているわけではなく、ただ判断材料を集めているに過ぎないでしょう。

### 正しい「答え」、ではなくて…

社会関係が極端に違う相手と接する事、“わたし自身”による関係を求められると感じる事、この2点を実習生は、それまでの人生にはなかった、他者からの新しい関わられ方として受け止める事が多いです。

そして実習生は、正しい「自分の言動のあり方の質や度合」がわからず、指導教員や、指導職員に正解を聞きにきます。

「子ども達からのこういう関わり方に対し、私はどうすればいいのでしょうか?!」

しかし、「こうすればいい」という正解はありません。

なぜなら、施設の子ども達は、「実習生としての正しい言動」を求めているのではないのです。

だからといってもちろん、実習生は好き勝手に自分の思うまま動いていいわけではありません。実習生には、厚生労働省が挙げている3つの“ねらい”という果たすべき課題があり、それには実習させていただいている施設の方向性や考え方に基づいて動くことが責務となります。つまり、これらが実習生の“役割”と呼べるものです。

子どもが求めているもの=実習生の役割、ではないのです。

そういえば育児経験のある女性が、児童養護施設での実習をした時には、「どう動いたらいいかわからない」というような発言はそう聞こえてきません。これはただ単に育児経験があるから、というよりは、育児という“わたし自身”が試される経験を経てきているからではないでしょうか。子育てに限らず、「自分の大好きな趣味を極めて全国大会に行った」とか「ヒッチハイクで世界を旅した」といった、仕事とはまた違った“わたし自身が試される”経験、あるいは自ら“わたし自身を試す”経験をしたことのある実習生もまた、自らの中にしなやかな芯を持ち、前述したような戸惑いをもつことが少ないように感じます。

### 「私って何？」が業務に直結する仕事

社会福祉の仕事は、児童分野、高齢者分野、障害者分野、低所得者分野等々、どんな分野でも、専門職としての倫理・知識・技術を活用することはもちろん、それに加えて、支援のための道具としての自分自身をいかにコントロールし、どんな時にどのように活用するのかという事を考え、行動しなければなりません。だからといって、滅私奉公ではありません。よって支援のための道具である自分自身を知るプロセス、“自己覚知”が欠かせません。高齢者施設や障害者施設でも、実習生が利用者から「試されているような感じがする」ことはあります。

児童養護施設職員の仕事は「自立支援」であり、事務的な仕事をするための知識、技術も大切な仕事のスキルになるのですが、前述した理由から、他の社会福祉職と比し

でも特に、“わたし自身”が最大の道具になる仕事だと思うのです。

ですから、自己覚知を繰り返す事と、自分自身のあり方を素直に見つめ、認める事がこの仕事をする上で特に重要であると思います。それ抜きでどんな支援をしても、単なる自己防衛としての“ええカッコしい”になってしまうでしょう。“ええカッコしい”の嘘は、子どもにすぐにバレるように思います。

そんな児童養護施設において、実習生という役割の中で、「“わたし自身”って何やねん」と考え、ゆらぎ、悩み、試行錯誤しながら、子どもと子どもを取り巻く環境と向き合っていく、そのプロセスこそが、児童養護施設における実習の、大切な学びのひとつであると思うのです。

### **自己防衛としてのええカッコしい**

ところで、私は“ええカッコしい”ですし、昔はさらに今の10倍くらい“ええカッコしい”でしたから、施設職員としてとても苦勞しました。今でもふとした時に、施設職員だった頃の、自己防衛としてのええカッコしいを思い出し、

「ぎゃー！あれはなかったわ、やってもうたわ！悪かったなあ、〇〇ちゃん！」

と、今更ながら心の中で、子どもに謝っています。

せめて反省点として、今後の自分に生かしていこう、と思うのです。